
たゆたう波の終わり

河野 る宇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たゆたう波の終わり

【Nコード】

N6322R

【作者名】

河野 る宇

【あらすじ】

*『自由』という言葉はなんと魅力的なだろう。そしてなんと無責任な言葉なのだろうか……その言葉にのし掛かる大きな責任を目に映る文字からは推し量る事は難しい。＜アクションジャンルです＞

小説サイト「野いちご」にも投稿させていただいている作品です。

第1章　謎の少年

「はあっ……はあっ……」

少年は森の中で荒い息を整える。金髪のショートヘアにエメラルド色の瞳。不思議な雰囲気をもし出している。

ここは『アルカヴァリユシア・ルセタ』

ヨーロッパにある小国だ。その3分の1は広葉樹林である。

「はあ……」

どれくらい走ったり歩いたりしたのだろうか。少年が着ている服と背負っているバックパックからかなりの距離を徒歩で移動したに違いない。

「……」

少年は見上げて木々の間から空を見た。陽は傾き、しばらくすればあかね色の光が世界を染める。

少年の顔には自然と笑みがこぼれていた。持っていた食料も底を突き数日間、何も食べていない。それでも少年の目には喜びの表情が輝いていた。

見えるもの全てを目に焼き付けようとするかのように少年はじつくりと見回した。

* スープとライフ

「……？」

しばらく歩くと何やら良い匂いが漂ってきた。自然と足がそちらに向く。

「！」

目の前に見えたのは倒木の前にたき火。その火の上には小さめの鍋がちょこんと料理を煮立たせていた。

「……」

少年は喉を鳴らした。夕暮れ時、辺りを見回すが人らしい影は無く少年はためらった。

でも、だめだ。勝手に人のものを食べるなんて……常識をしつかりと学んでいる少年はそのスープを物欲しげに見て遠ざかるうとした。

「食べていけないのか？」

「！？」

茂みの影から発せられた声に少年は体を強ばらせる。そんな少年の前にバサバサと葉っぱを揺らして男が現れた。

「いいんだぜ、遠慮しないで食べるよ」

その手にはウサギ。今狩ってきたものだろう。まだ血がしたたっている。

「……」

少年はその男に目を丸くした。そして男の全体をマジマジと見つめる。その瞳はやはり輝いていた。

「あん？ 俺の顔になんか付いてるか？」

ドツカと倒木に腰を落とし男は自分のあごをさすった。

「……」

硬い漆黒の髪に空のような青い瞳。年の頃は30歳前後だろうか。

「！」

少年は男の脇に置いてあったライフルにビクリと反応した。

「ん？ これか？」

言ってライフルに手をかける。

「ア！ な、なんでも……ありま、せん。失礼……しました」

少年は慌ててとぎれとぎれに言葉を発し離れようとした。

「待てよ」

「！」

男は少年に銃口を突きつけて鋭い目を向ける。

「……っ」

少年は息を呑む。しかし――

「！」

男は少年の顔を見てニヤリと笑いライフルを地面に寝かせた。

「腹減ってんだろ？ いいから食べていけ」

「で、も……」

煮え切らない少年の態度にイラついた男は声を荒げる。

「ガキが遠慮してんじゃねえ！」

「は、はいっ！」

少年は声に驚いて男の右斜めに腰掛けた。

「それでいい」

につこり笑い狩ってきたウサギを脇に置いてカップを取り出し温

かいスープを注いだ。

「……」

少年はマジマジとそれを眺める。

「ほらよ」

「あ、ありがとう……ございます……」

金属で出来たカップとスプーンを受け取りスープをじっと見つめる。

「……」

中を確認すると鶏肉らしきものと野菜が意外と多く入っていた。匂いからしてチキンコンソメ味。

「遠慮すんな。毒なんて入ってねえしまだ沢山ある」

「はい」

少年は少し口を含むとしっかりと噛みしめた。そしてゆっくりと飲み込む。

「！」

ほう……男はそれに感心する。

見た処、最後に食べ物をおにしたのは数日前のようだ。そんな状態でいきなり食べ物を胃に入れば折角食べたものを吐き出す事になる。

男はそれに笑って説明してやろうと思っていた。しかし少年はその知識を持ち的確に対処している。

「……」

こいつ……普通のガキじゃねえな。

「お前、名前は？」

「あ……ベリル」

少年は少し戸惑いながら名乗った。

「そうか。俺はカイルだ」

立ち上がり地面にしゃがみ込むと倒木をまな板代わりにウサギを解体し始める。それを眺めながらベリルと名乗った少年はスープを口に運んだ。

そしておずおずと尋ねる。

「あなたは……兵士、なのですか？」

「んあ？ 俺は傭兵だよ」

言いながらカイルは手際よくウサギを解体していく。

「傭兵……」

「珍しいか？」

ベリルは無言で小さくうなずいた。

食べ終えた少年は立ち上がりペコリと頭を下げて口を開く。

「ありがと……ございます。それでは、失礼しま——」

「寝ていけよ。疲れてんだろ」

ベリルが言い終わらないうちにカイルが口を開いた。

「し、かし……」

当惑するベリルにカイルは薄く笑う。

「ガキが遠慮すんなって。俺が火の番しててやるから。それなら怖くねえだろ」

「……」

ベリルは戸惑いの表情を浮かべる。彼は少年が何かから逃げているのだと考えた。

それ程に少年は周りの気配を必死で探っていたからだ。

「ほら」

毛布をベリルに投げ渡す。

「……ありがとう」

「……」

静かな寝息を立てているベリルをカイルは見つめた。

俺の服に怯えていたな。^{おび}武装している奴らにでも追われているのか？ 何かに追われているのは解ったが……

「教えてはくれそうにねえな」

少年が寝る前にいくつか質問してみたが彼は口をつぐんで何も答えなかった。よほど人には言えない事情があるのだろう。

無理に聞くのも大人げないしな。カイルは思いながら薪を^{まき}1本、火にくべた。

「ん……っ」

「！」

毛布にくるまり体を丸くして寝ている少年の顔は苦悩の表情を浮かべている。グレーのパンツに白いスニーカー。そして長袖の前開きのシャツ。

こんな森の奥にいる恰好じゃない。初めは森で遭難でもしたのかと思ったが……それほどに少年の服は汚れてボロボロなのだ。

しかしカイルはその汚れに反応した。あの汚れ方は格闘した跡だ。シャツに付いている血は誰かと格闘し倒した返り血だと窺^{うかが}えた。気配の探り方と動きは洗練されていると言ってもいい。

「……」

考えれば考えるほど不思議でならない。

そもそもどこから来たのだろうか……？ この近くには民家も山小屋も無い。

「そついや……ここから歩いて数日行った処に軍の特別施設があったな」

そこから来た？

「んな訳無いか」

そしてカイルは少年の口調を思い起こす。たどたどしいしゃべり方。間違いない……

「こいつ言語障害を起こしてる」

言葉が上手く出せなくなるほどのショックを受けたんだ。

バカ丁寧な口調の他に子どもにしては妙なしゃべり方だし。とカイルはあごをさすりながら思索した。

朝――

「！？」

ベリルは物音に飛び起きる。

「んあ？ 起こしちゃったか。まだ寝てていいんだぜ」

「ア……おはよう、ございます」

片付けをしているカイルを見てホツとする。少年は借りた毛布を綺麗にたたみカイルに手渡した。

「おう、すまん」

カイルはベリルを見つめた。

「行くアテはあるのか？」

「……いえ」

目線を落としたベリルにカイルはクイと首を動かす。

「その荷物持ってついてこい」

「？」

ベリルは訳も解らず言つとおりにした。

*ドライブ

しばらくカイルの後をついていく。

「！」

数時間後、森が開け1台の車が視界に入った。そこから森は終わり向こう側には平原が広がっていた。

「ピックアップトラック？」

「おう。俺の車だ」

「……これが」

ベリルは物珍しそうにその車をマジマジと眺めた。

「古いからあんまり見るなよ」

カイルは荷物を受け取り荷台に投げ入れる。

「乗れよ」

「え？」

荷台に片手を乗せニヤリと笑ってベリルを見やった。

「乗ってみたいだろ。どうせ行くアテが無いなら好きな処で降りればいい」

「……」

少年は助手席の窓を開け嬉しそうに流れる風景と風を肌で感じる。

「楽しいか？」

「はい。とても」

ベリルは少年らしい笑顔を見せたが違和感のある物言いにカイルは眉をひそめる。

目の前の光景や物を知っているのに知らないような、子どもが図鑑で見たものを初めて目の当たりにした時の顔に似ていた。

まるで……生まれてからずっと病院から出た事が無い人間のようなそんな感覚を受ける。だが見たところ少年は病弱という訳でもなさそうだ。

見るもの全てに感動しているような表情に男は首をかしげた。

「！」

カイルは何か気付いてパンツのバックポケットを探る。着信を知らせる振動を携帯が伝えていた。

「！」

ベリルは携帯を見て少し驚く。と、いつても何に対しても少年は驚いた顔をするのだが。それを横目で見ながらカイルは携帯にイヤホンマイクをつないだ。

「おうジャンか、どうした？」

「……」

なんの話をしているんだろう……？ ベリルはジッとカイルの横顔を見つめる。

「今A国の東の森だが……ああ？ 急ぎか？ 解った。ポイントは？」

一通り会話して電話を切る。不思議そうに見つめるベリルを一瞥しカイルは小さく溜息を漏らした。

「参ったな。仕事だだよ」

「！ 傭兵のですか？」

カイルは苦笑いした。

「ああ。俺がA国にいるって言ったら近くだから手を貸せとさ」
肩をすくめる。

「……」

そしてカイルはベリルをちらりと見てしばらく考えた。戦場へこんな何も知らないような子どもを連れて行くのもなあ……だからってこのまま放っておくのも……そんなカイルをベリルは見つめる。

困ったような顔をしたあと少年に尋ねてみた。

「……来るか？」

「はい」

即答したベリルにカイルは少し驚く。

常に何かに怯え戸惑った態度だった少年とは思えないほどの目の

輝きを一瞬、見せたからだ。

「……」

ホントにこいつ何者なんだろね。カイルは肩をすくめた。

走らせること数時間――

「！」

目の前に大勢の人間が行き交うキャンプが視界に入った。カイルは車を止めて外に出る。それにつられるようにベリルも外へ。

「ようカイル！」

「おう」

カイルを見つけた1人の男が笑顔で近づいてきた。どの人間もミリタリー服に身を包み腰には銃がたずさえられている。
ハンドガン

「……」

ベリルはその光景を目を輝かせてじっと見つめた。

「人が大勢いる」

ぼそりとつぶやいた。その言葉はカイルの耳に届いていたが別段おかしい感覚もなく聞き流した。

「折角の休暇だったのによ」

「すまん。人手が足りなくてな」

「！ 足りない？」

聞き返したカイルに男はうなずきながら続ける。

「ああ、要請した人数だとちよいとばかり無理があつてな。かといつて遅らせる訳にもいかず。近くにいる仲間に片っ端から連絡してるんだ…… って何このガキ」

男はようやくカイルの側にいるベリルに気が付いた。

「ああ。ちよつと訳アリだね」

「そうか」

大柄の男にベリルはおずおずと小さく頭を下げた。

「随分やわつちよろいガキだなあ」

バンバン！ と笑いながらベリルの背中を強く叩く。ベリルはそ

れに苦笑いを返した。

「おうボウズ。名前は？ 俺はジャン」

体格の良い栗色の髪に青い目の男は明るくベリルに手を差し出した。

「ベリル……です」

少年は戸惑いながらもその大きな手に握手を返す。ジャンは握手しながら再びベリルの背中を叩きカイルに目を移した。

「こいつも使うのか？」

「後方支援くらいなら出来るだろう」

ベリルは驚く事もなくカイルの言葉に聞き入る。

「っていうか服ボロボロじゃねえか」

「何かみつくるってやってくれ」

子供用なんて無いぞ。ジャンは言いながらベリルをテントの1つに促す。テントに入りしばらくしてジャンが出てきた。

「一番合いそうなサイズを渡したが。なんだよ？ あのガキ」

聞かれてカイルは車の荷台に背中を預け腕を組んで応えた。

「森の中で拾ったんだ」

「拾ったあ………？」

ジャンは素っ頓狂な声を上げる。

「家出……とかじゃないのか？」

「バカ言え。俺がいたのは東の森だぞ」

「！ 軍の施設がある森か」

「あそこは民間人は立ち入り禁止だ」

カイルは立ち入り禁止区域ギリギリの森でキャンプを楽しんでいた。

「お前も物好きだねえ……で、あのガキどうするんだ？」

「まだ決めてない」

そこへ、ベリルが袖を折りながらテントから出てきた。

「おう。ちょい大きかったか。すまねーなそれが一番小さいサイズなんだ」

「いえ。ありがとうございます」

「銃は扱えるか？」

ジャンは目の合った仲間に右手をちょいちょいと何かを要求するように動かすと仲間がマシンガンを手渡した。それをベリルに差し出す。

ベリルは躊躇なく受け取りマシンガンのチェックを始めた。

「！ ほ……こいつ手慣れてるぜ」

「……」

カイルはさらに興味をつのらせる。

「ジャン！」

遠くから別の仲間が彼を呼んだ。カイルは手慣れた手つきでマシンガンを持つベリルを一瞥し何か話をしているジャンに目を移す。しばらくしてジャンが戻ってきた。しきりとベリルを見る彼にカイルは眉をひそめる。

「ベリル」

「はい」

ジャンはベリルを呼び腕を組んで発した。

「構えてみる」

ベリルは言われた通りにマシンガンを構える。

「なんの真似だ？ ジャン……」

カイルは怪訝な表情を浮かべた。

「よしOKだ。前線が足りない」

「！ こんな子どもを出すつもりか！？」

「依頼内容はなんですか？」

ベリルは動揺もなく問いかける。

それにカイルとジャンは少し当惑したが男は左手を腰に当てて説明を始めた。

「A国からの要請だね。テロリストの一掃だよ」

「テロリスト？」

「どっかの国のテロリストがこの国に潜伏してたのさ。まあそれは

表向きで実際は殺しを専門にしてる集団だそうだ」

そしてジャンは南を指し示す。

「ここから1kmほど行った処に廃屋があつて奴らはそこに潜伏している。どっかの金持ちが数年前に広い土地を買つてデカイ家を建てた」

建てたはいいが結局環境に馴染めず引越した。土地も売り払い残つたのは廃屋のみ。

「土地の所有者は？」とカイル。

「買つてすぐ事故で死んだ」

ある意味『いわくつき』の土地か……カイルは思つて苦い顔をした。

「ここは土壤もあまり良くない」

ジャンの言葉にカイルとベリルは辺りを見回す。

確かにここまで来た道程は草原が広がっていたのに南に目を向けると雑草がまばらに生えている程度だ。

「昔、なんかの工場でもあつたのかね」

ジャンが鼻を鳴らす。

第2章　火薬と血と仲間

「とにかくそういう事なんで」

ジャンはカイルの背中を叩いて遠ざかった。

「……」

南をぼうつと眺めているベリルを見やる。

まったくこのガキ……とカイルはベリルの頭を軽くこづいた。

「??」

ベリルは意味が解らなくて頭を押えながらカイルを見つめる。

「お前いくつだ」

「15です」

ホントにガキじゃねえか……カイルは眉をひそめてじつと見下ろした。こいつの言動は何歳なのか解らなくさせるんだ。

今では言語障害も無くなっていた。

* 戦場へ

「相手は何人だ？」

カイルは他の仲間に詳細を聞いて回る。それをベリルは後ろから追いかけた。

「30人程度らしい」

「ふむ……」

こちらは25人。確かに苦しいな……とあごをさすりながらカイルは南を見つめる。

「！」

気が付くとベリルが廃屋の見取り図を仲間から見せて貰っていた。

「大きい家ですね」

「だろ。部屋数も多い」

「窓ガラスは？」

「全部割れてるって話だ」

「……何やってる」

カイルは違和感なく仲間の中にいるベリルの手元をのぞき込んだ。ベリルはハツとして慌てて立ち上がる。

「すいません。地形や建物だけでも把握しておこうと」

「お前……戦場は？」

「初めてです」

それにしちゃあ随分と手慣れているというか場数を踏んでいる感じなんだが……そんなカイルの表情にベリルは説明を加えた。

「シミュレーションを何度か」

「！ ああ、なるほど」

……って納得出来るかよ！ そのシミュレーションとやらを一体どこでやってたんだ？ どうせ訊いても話しちゃくれないんだろっけだよ。

とベリルを溜息交じりに見下ろす。

「今から約1時間後に決行だ」

戻ってきたジャンがカイルに作戦を伝えた。

「！ 夜間ではないのですか？」

その言葉にベリルが怪訝な表情を浮かべて問いかける。基本的にこついつた攻撃は夜間がベストなのだが…… 1時間後といえば昼過ぎだ。

それを知っているベリルにカイルはぴくりと眉を動かした。

「相手の方が俺たち傭兵より夜間に長けているんだよ。デカイ家だといっても狭い事には変わりない。視界のおぼつかない夜間より昼間を選んで戦った方が有利だ」

ジャンの説明でベリルも納得する。

「お前はカイルと同じチームだ」

「解りました」

カイルたちはBチーム。西からの突入だ。

南には玄関のAチームが監視と攻撃を兼ねる。双眼鏡を覗くとかつては家を取り囲んでいたであろう白い塀の残骸が散乱していた。

冷静な表情を見せているベリルだがカイルは少年が緊張している事を読み取る。

「！」

背中を軽く2度叩いたカイルにベリルはニコリと笑いかけた。

「お前は後ろからついてくるだけでいい」

ベリルは無言で頷く。

武装している姿はいつぱしの兵士に見えるがまだ少年の面影を残す顔立ちにカイルは目を細めた。

決行まで10秒前——仲間たちの緊張が高まる。

3……2……1……決行！ 南のA班以外は一斉に建物に走った。

A班はリーダーを務めるため遅れて突入する。

100m地点から建物に走り寄り、30m地点にさしかかった時

「！ 待つて！」

「うつ！？」

「なんだっ？」

「えっ！？」

ベリルの制止する声で立ち止まる。

「どうしたんだ……？」

「怖くなつたか？」

仲間たちの声を意に介さずベリルはいぶかしげな表情で聞き耳を立てるようにしばらく正面の地面を見つめた。

「……」

そして一番前にいる仲間の足下に近づいた。

しゃがみ込むと……

「！ テグス？」

仲間の1人がその足に細い糸が少しかかっている事に気が付く。

「動くなよ」

金髪に栗色の瞳のほっそりとした顔立ちのリッキーがその仲間
慎重に近寄った。

「……どこにつながってるんだ？」

目をこらしてテグスを辿る。

「！」

前方に何か見えた。

「パイナップルだ」

テグスは10m先ほどの処でパイナップルという愛称で知られる
手榴弾のピンにつながれていた。

「ここでピンが外れて、走ってきた奴にドカンか」

「トラップはいくつある？」

黒髪に青い瞳のケインが問いかける。

「見たところ……これだけだな」

「お手柄だ」

ケインがベリルの背中を叩いた。

「ちょっと待て！　ここにトラップがあるって事は他の仲間はい？」
カイルがそう言った刹那――

<うわっ>

<ぐお！？>

ヘッドセットから爆発音と仲間の叫び声。

「おいっ大丈夫か？」

<ト、トラップが……っ>

その声を聞きながらリッキーが少年を見つめる。

「……こいつがいなかったら俺たちも同じ目に？」

<負傷者はキャンプに戻れ！　他は続行だ>

ヘッドセットからジャンの声。その声に無言で進むもうと指示をする。トラップを解除して再び建物に向かって走り出した。

「……」

なんて勘を持っていやがる……カイルは少年を見つめた。

「！？」

地面に弾丸の当たる音と小さな土煙が舞う。

「！！」

仲間は一斉に出っ張っている地面を盾にした。

「！！」

「早く避ける」とカイルがベリルの袖をグイと引っ張り自分の処へ引き寄せる。

「他の場所でも銃撃戦が始まってるな」

ヘッドセットから聞こえてくる音にリッキーが応えた。カイルたちは建物まで15mほどで立ち往生する。

「……」

ベリルは前方を見て自分のマシンガンに目を移す。

「単発なら……」

「あん？」

つぶやいたベリルにカイルは怪訝な表情を浮かべた。

「……」

少年はカイルを見つめるとマシンガンを手にも口を開く。

「そのまま肩を貸してください」

「おい？」

右側に逃げていたベリルとカイル。

ベリルはカイルの左肩にマシンガンの銃身を据えたと左目で照準を合わせた。

「お前……左利きなのか？」

「両利きです」

1、2度深呼吸して引鉄ひきがねを引いた。

「！ 当たったぞ」

仲間の1人が倒れた敵に驚く。

「私がここで牽制けんせいしています。その間に建物に」

少年はそう言うが子ども1人を残していく訳にはいかない。仲間たちはどうしたものかと顔を見合わせた。

「俺がついてる」

カイルの言葉に仲間たちは互いに頷いて建物に向かって走った。

「やるじゃないか」

「いえ。手過ぎた真似をしました」

カイルの言葉に謙遜けんそんする。

突然、現れた新米の子どもが他の仲間たちをさしおいて出しゃばる事は確かに暗黙のルールの中ではあまり良い事じゃない。

しかしこの状況下ではそれが最良の方法だった。

「お前に戦術を教えた奴は凄い奴だったのか？」

「！ ……」

ベリルはそれに一瞬、体を強ばらせた。目を伏せるその表情はどこか愁いを帯びている。

「元A国の兵士だったと聞きました」

「ほう」

「カイル！ もういいぞ」

聞こえてきた声に少年とカイルは建物に向かって駆けだした。 2

人は仲間たちと合流し建物の壁にへばりつくようにしてマシンガンを構えた。

「中に入ったチームはっ？」

カイルは銃声の響く中、声を張り上げて尋ねる。

「まだだ！ やっぱり数が少ない」

「チッ……敵の食料が尽きるのを待った方がよさそうだが……」

ぼそりと言ったカイルの言葉にベリルは応えた。

「飢餓状態の相手は何をするか解りません」

「まあな。だがこんな室内戦にならずには済んだかもしれない」

「敵が重火器を持っている場合、室内戦に持ち込んだ方がこちらの戦力を大幅に減らされる危険は無くなります」

「！ お前、言うね」

カイルは少年にニヤリと笑った。

「余計なことを言いました」

「別に怒っちゃいねえよ」

ベリルの頭にポンと軽く手を置いた。それに少年は複雑な表情を見せる。

そういう事をされるのに慣れていないような……妙な顔だ。

「中の状況が掴めない！」

カイルたちBチーム、西の班の壁には大きめの窓があるだけで侵入には困難を極める。四方から攻撃したのは敵を分散させるためである。

元々、庭に続く引き戸があつたと思わせるがコンクリートで窓にしてあるようだ。

仲間の1人が手榴弾のピンを外して中に投げ入れた。爆音と衝撃波が窓から吹き出される。

「……」

のぞき込むと、うずくまっている敵の姿が見えてすかさず1人が手を組みその上に仲間たちが次々と足を乗せ侵入していく。

最後にその仲間を引き上げカイルたちは侵入に成功した。

* 戦果

辺りを警戒する。別の部屋に続く入り口に銃口を向け別の仲間が敵を拘束した。

「お前はこいつらを監視している」

ケインはベリルに指示した。少年は黙って頷き縛られた敵の近くでマシンガンを手にする。

「……」

敵を見つめる。1人の腕から血が流れていた。ベリルはハンカチを取り出し、しゃがみ込む。

「！」

ハンカチを巻かれた敵は驚いて少年を凝視した。そんな男にベリルはニコリと笑いかける。

「どうせ殺すつもりだろうが……余計な事をするな」

ぼそりと発せられた言葉は英語圏の人間では無いのだと窺えた。睨み付ける男を見つめベリルは仲間に顔を向ける。

「彼らは殺されるのですか？」

「ん？ いや。国に強制送還されるんじゃないか。この国の人間じゃねえからな」

それを聞いた少年は再び男に視線を合わせた。

「あなたがたは強制送還されます。その国の処置は知りませんがこのまま殺される事はありません」

ベリルは彼らの言葉で説明した。

「ククク……俺たちは殺しまくったからな。処刑されて終わりさ」

別の男が終焉しゅうえんを迎えるような薄笑いを漏らした。それにベリルは眉をひそめる。

「解っているのなら何も言う事はありません。しかし、命を奪ってきた罪を理解しているのなら死を待つまで何か出来るハズです」

「なんだって……？」

少年の言葉に男たちは目を丸くした。

「おい……あのボウズ。あいつらの言葉を話せるのか」

仲間の1人がベリルの姿に気がつきカイルに耳打ちする。

「……」

カイルはその光景を無言で見つめた。

「少年。いくつだ」

「15です」

問いかけた男はそれに目を細める。

「俺は5歳の時から戦場で撃ちまくっていた」

「！」

「いつの間にか相手の命なんて考えられなくなっていたよ」

死ぬまでの時間……そうだな。負けを悟った男はつぶやいて目を伏せた。

「こんな俺でも死ぬまでに何か出来るだろうか？」

「出来ないハズはありません」

「……」

少年の強い声と眼差しに男は何も言えずただその瞳を見つめていた。

その時——入り口から銃声。残っていた敵が壁を盾にして撃ってきた。

「伏せろ！」

仲間が言った瞬間、敵の1人が銃を撃ちながら突入し入り口近くにいた仲間に銃口を向ける。

「！ よせ！」

ベリルはとつさに体が動いていた。

「うつ！？」

「ベリル！？」

彼らの言語で声を張り上げその銃口を向けた男の前に立ったベリルに仲間たちも動きを止める。

「……っ」

ベリルは苦い表情を浮かべながらも男の目を見続けた。

「どけ……」

ギラついた目でベリルを睨み付けながら銃口を彼の顔の前にちらつかせる。

「嫌です」

「この距離から外すと思っているのか？」

緊張感が部屋を満たす。その空気を破ったのは拘束されている1人の男の声だった。

「やめる。相手は子どもだ」

「お前……何言って……」

その男の言葉にベリルに銃口を向けている男は驚く。

「もういいじゃないか。俺たちは人を殺しすぎた」

うなだれる仲間を見てその男はベリルをギロリと睨みライフルを構えた。

「お前があいつに何か吹き込んだのか」

「やめろと言ってるんだ！」

「……」

ベリルは男を見つめておもむろに口を開く。

「本当はこんな事をしたく無いのではありませんか？」

「！　なんだと？」

少年は愁いを帯びた瞳でつぶやくように発する。

「虚しさを感じた事はありませんか」

「！　知った風な事を！」

彫りの深い顔に少しの戸惑いが浮かぶ。

「おい……なんの話をしてるんだ」

彼らの言葉が解らない仲間がカイルに問いかける。

「……さあな」

カイルはぶっきらぼうに応えた。そして張り詰めた空気の中ベリルと相手の動きをじっと窺う。

このガキ……闇雲に説教たれてる訳じゃない。相手の心の奥にあ

った“くすぶり”を感じ取ったんだ。

彼らの言語を理解出来るカイルはベリルの言動に眉をひそめた。

「……」

男はベリルの瞳に目を細め静かにライフルを下げた。

ベリルの行動で仲間にも相手にも思ったより負傷者は少なく済んだ。

しかしカイルはベリルを呼びつけて厳しい目を向ける。

「俺が言いたい事は解ってるな」

「はい」

カイルは右手を大きく挙げた。

「！ おっおい……そこまでしなくても」

「こいつも解ってるんだしょ……」

平手打ちしようとするカイルに仲間から口々になだめの言葉がかけられた。

確かにむやみに命を奪う事は避けられたが少年の勝手な行動は許されるものではない。少年もそれを十分に理解しているためじつとカイルを見つめ殴られるのを待っている。

「……」

何故だ……？ 何故こいつはそれを理解出来る。

実戦は初めてだと言っていた。シミュレーションや学んだ事だけでどうしてそこまでの場数が踏めるんだ。

「はあ……」

カイルは小さく溜息を吐き出すと上げた手をベリルの頭に乱暴に置いてわしわしとなでた。

「……？」

ベリルは拍子抜けしたように呆けた顔になる。

撤収作業を終えカイルは車に乗り込んだ。

「……」

少年は助手席側で乗り込まずにカイルを見つめる。

「どうした。乗らないのか？」

「いいのですか？」

「別に悪くないぜ」

「おう、ベリル！」

「え？」

背後から声をかけられ振り返った。

「！」

ジャンは少年に何かを投げ渡しそれを受け取って確認する。

「これは？」

「お前の報酬」

ジャンは笑って指を差しながら遠ざかった。

「……？」

それはサバイバルナイフ。革の鞘に収った小型のものだ。

「怖かったか？」

車を走らせながらカイルが問いかける。

「いえ、少しだけ」

少し……ね。カイルは返ってきた言葉に苦笑いした。

「さてと。折角のんびりしようと思ってたのに変な邪魔が入った。

別の場所に行くか」

そして外を眺める少年を一瞥する。

「お前、行きたい処あるか？」

「！ 私……ですか？」

聞かれて驚く。

「なんだ、無いのか？」

「いいえ！」

ベリルは少し戸惑いながらも口を開いた。

「ありすぎて……解りません」

「！ 言うねえ」

カイルは口の端を吊り上げる。

「じゃあ、オーストラリアなんてどうだ？」

「！ オースト……ラリア」

第3章　死に向かう生

ベリルはそれに少し眉をひそめた。

「人種至上主義者がまだ多く存在する国ですね」

「んあ？　俺にはそんな事わかんねーけどあそこはいいぞ。アボリジニたちの精霊が宿る大地だ」

「精霊……」

「そんなの信じねえか？」

カイルの笑顔にベリルは言葉を詰まらせた。

「いえ……すみません。ただ持っている知識だけで発言してしまいました」

「お前、物知りだね」

「それが『仕事』でしたから」

「仕事……？」

「ずっと施設で専門知識を学んでいました」

「！」

カイルは目を細めた。

こいつ、少しずつ自分の事を必死に話そうとしている……

*その心情

「無理に話さなくてもいいんだぜ」

「！」

カイルの言葉に喉を詰まらせる。

「……」

何か言おうとしたが声にならないようにそのまま頭を垂れた。
うん

「降ろして……ください」

「！」

カイルはゆっくり車を止める。

「……」

目を伏せて動かないベリルをハンドルに両腕を乗せて見つめ溜息を吐き出した。

「ここから一番近い街でも歩いて1日以上かかるぞ」

そして外を眺めぼそりとつぶやく。

「そろそろ夕暮れだな」

「！」

ベリルはそれに反応して外に目を向けた。

「おーし。今日はここで寝るぞ」

「え……？」

カイルは言って車を道路から外し平原の中へ――

「おら、手伝え」

外に出て飯ごうの準備を始めた。

「……」

ベリルはおずおずとドアを開いて車から出る。

「ん……」

鼻歌交じりで夕飯の準備をするその姿をしばらく眺めてベリルは大きく息を吸い込んだ。

「カイルさん」

「！ 呼び捨てでいい」

ベリルはカイルを見据えた。

「私にあなたの技を教えてください」

「！」

カイルは驚いてベリルに目を合わせた。

「俺の弟子になりたいって事か？」

「そうです」

それにカイルは鼻で笑う。

「ガラじゃねえ。他をあたりな」

「あなた以外にいません」

カイルは立ち上がり少年の見上げる瞳に目を合わせた。それが冗談やその場の感情でない事を見定める。

「……」

確かに傭兵としての適正はある。むしろ十分過ぎるくらいに……

しかし、なんだろう。この違和感は……

言い表せない感覚がカイルの全身を支配した。

こいつは死にたい訳じゃない。だが死に場所を探しているような妙な感じを受ける。駆け足で死に向かおうとしている。そんな感じだ。

死にたい訳じゃない人間が思った通りに死ぬとは限らない。

ならば……こいつの『運』に賭けてみるのも悪くない。カイルは口の端をつり上げた。

「クク……」

彼は自分の心の奥にある感情に笑いをこぼした。

そつだ、俺はこいつを育てたい。そんな感情が止めどなくわき出てくる。鍛えればそれに比例して強くなるだろう。

俺はそれが見たくて仕方なかった。

「とりあえず。イスになるものを探せ」

「はい」

パチパチと薪が音を立てる。オレンジの炎をベリルは見つめた。

「カイルは何故、傭兵に？」

「ん？ なんてかなあ……」

薪をくべながらカイルはゆっくり語り始める。

「俺の親父が軍人で、まだガキの頃にどっかの国の内戦なんかで
かり出されてそのまま帰ってこなかった」

「！」

「まあなんてーか。爆発で木っ端微塵になっちまったらしくて骨も
持って帰れなかったそうだ」

本来なら父親を死に追いやった戦いや兵士を憎んでもおかしくは
ない。

しかし彼は違っていた。

「親父は俺にいつも言ってたんだ。『国を守るために戦う事は素晴
らしい』ってな」

別の国の内戦にかり出された事に国を守るという意味はあるのだ
ろうか？ それは利権がらみの内戦だった。

その国には豊富な資源があり国が支援する側が勝たなければ色々
と問題となる。

「軍が守るのは世界の市場だ。正しい戦いだっただのさ」

納得のいくような顔はしていない。

「俺は親父から色んな事を聞いて学んでいた。兵士というものに憧
れていた。今更それを親父が死んだからって逆転させられるほどか
しくなかったのさ」

カイルは肩をすくめる。

「で、初めは軍人になった。だがこれが俺のしたい事じゃないって
思って傭兵になった」

少し笑ったカイルに小さく笑顔を返す。

「戦いでしか救えない命がある」

「！」

「悲しい事だけだよ。それが現実」

だから俺は傭兵になって良かったと思ってる。カイルはつぶやくように発した。

「……」

ベリルは沈黙しコーヒークップの中のコーヒーを見つめた。

「荷台で寝ようぜ」

カイルは笑いながら荷台を指さす。

「荷台ですか？」

「地面にいる虫に悩まされずに済む」

言いながら荷台に毛布を投げ入れた。

月明かりが大地を照らす——心地よい虫の音と夜行性の鳥の声。

「綺麗な星空だ」

カイルは両手を頭の後ろで組み薄く笑う。いくら大型のピックアップトラックといえど、余裕がそれほどある訳じゃない。

「……」

ベリルは星をぼうつと眺めながら何かを考えていた。

そして……おもむろに上半身を起こす。

「！」

月明かりに照らされたエメラルドの瞳。複雑な色を覗かせてカイルを見つめる。

「やはり、黙っている事は出来ないようです」

ベリルは眉をひそめて笑った。

*少年の闘い

「？」

ベリルの表情にカイルはいぶかしげな表情を浮かべる。

「母上はどうされたのですか？」

「オフクロ？ 病気で死にしまった」

「そうですか」

その答えにベリルは目を伏せた。

「それがどうした」

聞き返したカイルに少年は目を向けず暗い大地を見つめながら、ぼそりとささやくように口を開いた。

「私には『両親』と呼べる者はいません。親であると強いて言うなら……私を生み出した10人の科学者でしょう」

「ハ……なんだそれ……」

カイルは喉の奥からぼつりと笑いをこぼす。

ベリルは1度その瞳をまぶたに隠すと決意したように目を吊り上げてカイルに向き直った。

「私は実験No.6666。『キメラ』と名付けられた人工生命体です」

「……は？」

おおよそ思い返せば間の抜けた声を出したものだ。と笑いをこぼすほどの声を上げた。

「お前、それ本気で……」

笑いながら聞き返そうとしたカイルはベリルの表情に言葉を詰まらせる。

「……っ」

本当なのか——？ 声が出なかった。ベリルはそんなカイルを一瞥し話を続ける。

「ベリル・レジデントとは科学者たちが付けてくれた名です。ベル

ハース教授指揮のもと現存する人種のヒトDNAを集め人の胎内を介さずに人間を造り出す研究がなされました」

一端、言葉を切ったベリルの手は微かに震えていた。

「クローンでは1個体分のDNAでしかなく、さらにDNAの結合体としてでもなく子宮内での成長が必要です。彼らが求めた者は……」

また言葉を切りゆっくり息を吸い込んだ。

「あらゆる人種のDNAを1つとし子宮内での成長ではなく人を造り出す事――」

言い切ったベリルは溜息を吐き出しカイルに小さく笑いかけた。

「……」

頭が混乱しているのかカイルは目を丸くしたまま動かない。数秒ほどベリルを見てぼつりと発した。

「俺は頭が良くないんだ。もつと解りやすく言ってくれないか」

「……」

それにベリルは眉間にしわを寄せる。

「つまり……えと……」

簡単に言うのは難しいんだけど……と心の中でつぶやく。

「実験室で生まれたんです」

「ああ、なるほど」

納得したように手を打ったカイルだがベリルは何故か納得のいかない顔をした。

「んで、なんでそんなお前がここにいるんだ？」

問われたベリルは一瞬、体を強ばらせる。そして視線を落とした。

「……施設が襲撃されました」

「!?」

毛布を握るベリルの手に力がこもる。

「私のせいだという事は解っています……なのにブルー教官は私に逃げろと……」

「ブルー？ そいつがお前の戦術の先生か」

ベリルは視線を合わせず頷いた。

「300人の人が殺されました」

か細く発して頭を垂れ肩を震わせる。

「……」

カイルはそれに目を細めた。

300人の命。こいつは15歳でそれを背負っちゃったのか。どれほどの涙を流したのだろう。どんなに心が痛んだだろうか。

こいつは命の重みを知っているんだ。

『造られた命』

頭の悪い俺でもそれくらいは解る。

「……」

だから何だ？ 造られたからどうだというんだ。俺には関係ない。

「うん。そうだ」

俺にはそんなこと全然関係ない。カイルは星空を見つめ1人で納得した。

「？」

ベリルは1人ぶつぶつと喋っているカイルをいぶかしげに見やり首をかしげる。

「!？」

するといきなりカイルは上半身を起こしベリルの頭をぐしゃぐしゃとまで回した。

「お前、今から俺の弟子な」

驚くベリルにニツと笑う。

「！ いいのですか？」

笑顔になった少年にカイルは再び笑いかける。

「音^ねを上げるなよ」

「はい」

ベリルは少年らしい笑顔を向けた。

第4章　言葉の重さ

それから星空を見ながら2人は眠りについた。

「……」

カイルは目を閉じてベリルの言葉を反芻^{はんすう}する。

少年の話のあとカイルはさりげなく質問してみた。

『そこで待っていれば国の人間が来たんじゃないか？』と……

その問いかけにベリルは少し目を伏せたあとカイルの目を見つめて薄く笑った。

「私は自分の足で世界を知りたかったのです。自分の手で、肌で触れたかった」

ほんの一瞬でもいい。『迎え』が来るまでは……

「……」

閉じたまぶたに力を込める。

こいつは本当に何も憎んではないんだ。自由を手にした今も国の人間に知られて迎えに来れば素直に従う気にいる。

「そんな奴を俺がほっとける訳ねえだろ」

カイルはぼそりとつぶやいた。

* 憂う笑顔

起床してカイルはオーストラリアに向け車を走らせた。助手席のベリルは昨日よりも晴れやかな表情を浮かべている。

「……」

きっとこいつはあの大地を気に入るだろう。カイルは目を細めた。広大な荒れ地と自然公園に砂漠——精霊の宿る大地。

未だ短い歴史だが差別のあった時代も戦いもあった。そして不屈の精神も宿っている。

俺はこいつに戦いを教えなければならない。傭兵としての全てをたたき込んでやろう。生き抜く術も、やがて待ち受ける行き所のない感情も……こいつは全てを受け入れて行くのだろう。

カイルはこれからの事を思い描き口の端をつり上げた。

「……」

俺は心底、楽しんでいる。

カイルの期待は見事に的中した。

元々、戦闘の知識を持っていたベリルだがそれだけで傭兵として成り立つものではない。ベリルは仕事の度に注目の的となる。

弟子をとらないカイルが弟子をとった事と彼の的確な行動とそのセンスとが仲間たちの注目を集めていた。

そうして1年が過ぎ——今では立派に指揮が出来るまでになっていた。

「……」

手際よく次の仕事の準備をしているベリルをカイルは見つめる。

これは独り立ちするのと思ったよりも早いかもしれんな……ただ知識を持っているだけじゃない。それらを確実に活かしている。

初めての弟子の成長にカイルは嬉しくもあり寂しくもあった。

「お前、大学行ってこい」

「は？」

ベリルが17歳になった頃、カイルは唐突にそう言った。

「何故でしょうか」

その質問は当然だ。

学歴はあまり関係の無い世界にいるのにカイルはどうして大学の事を……

「傭兵っていうのはな、意外と表の世界とも通じている部分が多いんだぜ。お前、頭はいいが学校には行ってないだろ」

「それは……まあそうですね」

「なんか箔の付くもん持ってた方が便利なんだよ」

「……」

そう言われればそうかもしれない。

「解りました」

ベリルはしばらく考えたあと携帯を手にとった。

「サラ、少し頼まれてほしいのだが——」

馴染みの情報屋に電話をかける。

世界のあらゆる情報を持つ『情報屋』と呼ばれる者たちはいくつが存在していて、傭兵にはそれぞれ馴染みの情報屋が存在する。

情報の他にも色々要望を受付けてくれる処が親切だ。もちろんそれ相応の報酬を払わねばならないが。

数日後——ベリルは情報屋のサラから情報をもらい大学に向かった。

そして数週間後……

「……」

帰ってきたベリルにカイルは目を丸くした。

「もう取ってきたのか」

「なんとか一週間で承諾して頂きました」

「で、どこの大学？」

「えと……マサチューセッツ工科大学です」

「んな！？」

カイルは大口を開けて驚愕する。普通、一週間で卒業出来るもんか？ いや、させてくれるもんか？

「お前……どこまで天才？」

それにベリルは眉間にしわを寄せる。

「ここが話し合いの末に最も早く卒業させてくれると言ったので」

「そ、そうか」はっはっはっ

きつとあれだな、ベリルにいくつか試験を受けさせた結果、そのまま大学に困う事を考えたんだろうな……と大学側の思惑が見て取るように解るカイルは乾いた笑いを返した。

本当の処、カイルは彼に戦いから少し離れて過ごして欲しかったのだ。この2年ベリルは仕事かそれが無い日はカイルと過ごしていた。

カイルは彼を鬱陶しく思う事は無いのだが戦いばかりではいかなと思ひ大学を薦めた。

「……」

必死に俺から学ぼうとしている。どうしてそこまで……？

「もうちょつとゆっくりしたらいいんじゃないか？」

「え？」

ベリルはキョトンとした。

「いや、随分と熱心だからよ」

「！ ああ……」

ベリルはライフルを手入れしていた手を止める。

「そう……ですね」

目を細めて薄く笑った。

「いつ『迎え』が来るか解らない恐怖はあります」

「！？」

「しかし、そんな事で焦っている訳ではありません」

ベリルは彼の方に顔を向けて困ったような微笑みを浮かべる。

「自由……という言葉を実感しているのです」

「……？」

どういう意味なのだろう。自由ならばもつとゆっくりしてもいいだろうに……カイルは眉をひそめた。

ベリルはライフルをテーブルの脚に立てかけると静かに語り始めた。

「施設から無事に逃げ出せてあなたに拾われ私は手にした自由に歡喜しました」

組まれた手に少し力が入る。

「こうしてあなたに傭兵という仕事を学び、自由という言葉がどれほどの重みを持っていたのかがようやく理解できました」

「自由の重み……」

ベリルは宙を見つめて少し目を吊り上げた。

「自由にはそれ相応の責任がともなう」

「何もかもが許される事」

という意味ではない。

「したい事が出来る事」

それが自由。

そこにはルールがあり、それをする事には必ず責任が伴う。

「自由という言葉は酷く残酷にも……思います」

向けられた微笑みにカイルは少し胸が痛んだ。

「その言葉からは責任の重さを感じられないのですから」

ベリルは目を伏せてつぶやいた。

「……」

確かにそうかもしれない。

『自由』という言葉をはき違えずにいる者がどれくらいいるのだろうか。

その言葉のうえにのし掛かる責任を……どれほどの者が理解しているのだろうか。ベリルはそれを理解せざるを得ない生まれ方をし

ただ。カイルにはそれが痛いほど理解出来た。

喉を詰まらせるカイルにベリルはニコリと笑いかける。

「もうしばらくしたら少し一人旅を試みたいと思います」
「そうか」

カイルも笑顔を返す。

しかし——これがベリルにとって永遠に残る後悔となる。

*切り裂く音

仕事も一段落つき、ベリルはバッグを抱えて出発するために立ち上がった。

「気をつけてな」

「はい」

カイルの家の前、ベリル専用のピックアップトラックが主人が乗り込むのを心待ちにしているように道路に駐まっている。

ベリルはもうすぐ18歳を迎えるという時に一人旅を計画した。あてもなく車を走らせるという旅。

こいつらしいな。とカイルは口の端をつり上げた。

「旅先で俺に仕事が入った事を聞いても戻ってくるんじゃないぞ」
「しかし……」

困った顔をしたベリルの背中を押して車までうながす。

「いいから。すぐに帰ってくんないよ」

「……それでは行ってきます」

カイルは笑顔で手を振り見送った。

「……」

まずどこから行こうかな。ベリルは自然と顔がほころぶ。開けた窓から心地よい風が頬をくすぐり、これからの旅を思うと心が弾んだ。

施設ではディスプレイ越しでしか見られなかった風景と町並み。あらゆる専門家に学んだその知識はただの『記憶』でしかなかった。死ぬまでそれが続く事に眉をひそめたが己に課せられた運命を彼は素直に受け入れていた。

あの襲撃があるまでは……自分の記憶にあった人たちは死に絶え、もはや涙も枯れ果てて彼は施設をあとにした。

そうして出会ったカイルに感謝という言葉では表しきれないほど

の恩を受けた。自分の正体にも臆^{おく}さず、その技術を学ばせてくれる。彼と出会わなければ自分はこうして自由にはしていられなかったかもしれない。それを噛みしめながらベリルはハンドルを握る。

ベリルが旅立って数日後——カイルは船旅でも楽しもうかと荷物を積んでピックアップトラックに乗り込んだ。

豪華客船とまではいかないが、10日ほど海上を渡る客船の手続きを済ませた。

「ああ、お前も楽しんでこいよ」
ベリルに電話をして船に乗り込む。

乗り込んで1時間後、船はゆつくりと小刻みに船体を震わせて出航する。案内された部屋から外に出て心地よい風を全身に浴びた。

「んゝやつぱ気持ちいいね」
言って伸びをする。

「！」
カイルは数人の男たちに目を向けた。

妙に忙^{せわ}しない感じを受ける男たちに眉をひそめる。回りをしばらく窺^{うかが}った後、男たちは船内に入っていた。

暗くなり食堂で乗客たちは楽しく夕食に話を弾ませる。カイルも料理を堪能し優雅な演奏に耳を傾けていた。

その時——突然の轟音。カイルにはそれが銃声だとすぐに解った。
「！」

マシニングの音だと確認し素早く見回す。
「きゃああああー！」

「うわっ」
離れた場所から聞こえてくる叫び声。

しばらく様子を見てみるとテーブルが蹴散らされフロアを中心にぼつかりとスペースが作られていく。

ひとまずカイルは逃げまどう客の中に入り込み相手を見定める事にした。

そうしてしばらくすると辺りは静まりかえる。

「……」

慎重に目線を移動させるカイル。客たちは壁際に集められ座り込んでいる。

エントランスに向かう入り口に男が1人。フロアで客たちの様子を見ている男が2人。

皆、それぞれにマシンガンを持っている。

「……」

ここにいるのは3人か……操舵室には1人か2人だな。

カイルはそう予想を立て腰にあるハンドガンを手の感触で確認した。さすがに1人で3人を相手にするのは骨が折れるな……と眉をひそめる。

何せ人質が大勢いて適当に引鉄ひきがねを引けば誰かに当たる可能性が高い。

「！」

思案していると少し離れた処で同じように間合いを計っている男を見つけた。しかし同じ匂いはしない。

おそらくスポーツか何かをやっている奴だろう。体力に任せて攻撃するつもりか。

「！」

向こうもカイルに気付いたらしい目が合った。

カイルはゆっくり頷く。そして3人の敵を見つめて腰に右手を回した。1人がエントランスに目を移し1人がちらりと外に目を向けた。

「うわっ!？」

一番近い、外を見た男にナイフを投げつける。それは見事に腕に命中し持っていた銃ハンドガンから手を離れた。

同時に、カイルは目配せした男にパンツの裾に隠し持っていたハンドガンを投げ渡す。

そしてすかさず腰からハンドガンを抜き、こちらにハンドガンを構えた男に発砲。

「ぐっ!？」

駆け寄ってきた男に銃口を向けたカイルに男は回りに構わず発砲した。

「チッ」

舌打ちしてカイルは盾になるように立ち上がると発砲する男の胸に照準を合わせて引鉄を引く。

「……っっ」

男は胸を押えて倒れ込んだ。

「ふう……」

カイルは溜息を吐き出すと生きている男に近づいて武器を取り上げた。

「あ、あんた。凄いな」

投げ渡されたハンドガン握りながらその男が口を開く。

「……」

それに眉をひそめた。

「何故、撃たなかった？」

「俺……銃は扱った事が無いんだ」

「……」

カイルは呆れて渡した銃を取り上げた。

「こいつらを縛ってくれ。嚴重にだ」

「おい>

「!」

電子的な音声、無線機からだ。カイルは縛られた男の1人にある無線を奪い取る。

「そっちの様子はどうだ?>

「……」

少し見つめて男に目を移す。

「余計な事は言うなよ」

銃口をこめかみに突きつけて無線を送信状態にした。

「あ、ああ。なんて事は無いよ」

「そうか。くれぐれも油断するなよ」

「解ってる」

切れた無線を腰にねじ込みカイルは立ち上がる。

「！ あんたっ……それ」

カイルの脚と腕から血がにじんでいる事に気づき近くにいた男が驚いて声を上げた。それに苦笑いする。

「まあ無傷という訳にはいかんよ」

言いながらカーテンに歩み寄りナイフで切り裂く。適当な長さと細さに切つて銃弾を受けた場所を縛り上げた。

「あんた……何者なんだ？」

「傭兵だよ」

いぶかしげに尋ねられ薄笑いで応える。腕を2回ほど回し、しっかり縛ったかを確認した。

「！ どこに行くんだ？」

「操舵室」

男はそれにひどく驚いた。

「まだやる気なのか？」

「何言ってる。操舵室を制圧されてるんだぞ。どこに向かわれるか解ったもんじゃない」

ベリルがいれば楽なんだが……

「ハ……何考えてる」

自分で思つた事に小さく笑つた。

「しかし、なんだつてこいつらシージャックなんか」

エドワードと名乗つた男は苦い顔で縛つた男たちを睨み付ける。

「さあな。規模と場所からいつて金目当てだったのかもしれない」

「！ 海賊つて訳でもないだろ？」

「似たようなもんだろ」

目を据わらせてカイルは言い放つ。

「とりあえず、こいつらの監視を頼む」

「解った」

操舵室に向かうカイルはエドワードに言い聞かせるように歩きながら指を差した。

「いいか、そいつらの話に絶対に耳を傾けるな」

エドワードが頷くと操舵室に向けて駆け出した。

「さてと……」

回りを慎重に探りながら進む。

操舵室を制圧するのにそう人数はいらない。多く見ても3人だろう。

カイルは予想を立てながら操舵室の扉の前に来るとガラス窓から中をちらりと覗いてすぐにしゃがみ込む。

思った通り銃を持って船員たちを脅しているのは2人だ。

「……」

カイルはハンドガンを手にして深呼吸を数回、繰り返しキリリと眉をつり上げて立ち上がると扉を勢いよく蹴って開いた。

「！」

男たちが驚いてそちらを見るとカイルが引鉄を引くのは同時だった。

「！ チツ……」

1発は1人に当たったがもう1人は外した。素早く機械の1つを盾にして様子を見る。

「う、くそっ」

残された1人はパニックを起こしかけていた。

「なんだってこんな船にこんな奴が乗ってるんだよ！」

ぼそぼそとつぶやきながら近くにいた船員を引きずり出す。

「ヒッ……！？」

引きずり出された船員は恐怖で声が出ない。

*握りしめる拳

「……」
参った事になったな……カイルはキリリと奥歯を噛みしめた。
見えなくとも音で状況は把握出来る。

「おっ、おいっ！ 出てこいよ。出てこないといいつ殺すぞ」

「……」
しばらくしてカイルは持っていたハンドガンを男が見える位置で
投げ捨て、ゆっくり手を挙げながら立ち上がった。

男は震えながら銃口をカイルに突きつける。

「なんなんだよおまえっ！ 俺たちの計画を邪魔しやがって……」
うわずった声で叫ぶように発するとカイルを恐怖と共に睨み付け
た。それにさして動じる事もなくカイルは目を据わらせて男を見据
える。

「なあお前。1人でどうするつもり？」

「何がだよっ」

「そいつ撃つたとして、その間に俺がお前を殺せるんだが」

「！」

その言葉に男は一瞬、大きく唾を飲み込んだ。
脅しだ……出来る訳無い。カタカタと握っている銃が小刻みに震
え冷や汗がこめかみをつたう。

手を挙げて男を見据えたままのカイルに男はその目が怖くてたま
らなくなつた。

「うっ……うわあああっ！」

叫び声と共にカイルに向かって引鉄を引いた。

「——っ」

カイルは苦い顔をしてすぐ隠し持っていたナイフに手を回し男に
投げる。光が走りそれは男の胸に深々と突き刺さった。

「……」

男が倒れ込んだ事を確認するとカイルは片膝をついて右肩を押えた。鮮血が腕をつたい床に流れる。

「やべえな」

痛みに顔をしかめて薄く笑った。

「まったく、とんでもない船旅だ……」

そのまま意識を失った。

「カイル！」

青ざめた顔で病室に駆け込むベリル。

「！　よう。戻ってきちまったのか」

「何言ってるんですか！」

旅先でカイルの怪我を聞きつけベリルは急いで戻ってきた。

脚と腕、肩に包帯が嚴重に巻かれている姿を見て眉間にしわを寄せる。

「傷は……」

「ん、当たり処が悪かったらしくてな」

小さく笑って言ったカイルだがベリルはさらに眉をひそめた。

病室に来る前に見せて貰ったカルテ……ベリルにはそれでどのような状態なのかも、これから先の事も解っていた。

「悪いけどよ、その携帯取ってくれねえか」

「！　はい」

ナイトテーブルに置かれている携帯を手に取りカイルに手渡す。

彼は扱いづらい左手で電話を取るとどこかにかけ始めた。

「……ああ、俺だ。大丈夫だよ、命はある」

「……」

誰にかけているのだろう。ベリルは怪訝な表情を浮かべてカイルの会話に聞き入った。

「ベリルは18になったら独り立ちする」

「！？」

「早いかもしれんが奴ならいけるさ。俺とお前が見届け役だ。解っ

たな」

「カイル！ 何を……っ」

電話を切ったカイルにベリルは声を張り上げる。そんなベリルに
厳しい目を向けた。

「お前の事だから先にカルテを見たんだろう」

「！」

カイルは小さく溜息を吐き出し宙を見つめる。

「前と同じようには動けないとさ」

「カイル……」

仕事には戻れない。とカイル溜息混じりに笑みをこぼす。

「……っ」

ベリルはそれに奥歯を噛みしめた。

何故だ。どうして勘が働かなかったんだ……強く拳を握りしめる。

こんな時に何故、私は……！

「もうすぐ18だろ」

「！ はい」

カイルは天井を一瞥しベリルに移す。

「18になったら独り立ちしろ。俺とジェームズが見届け役だ」

「しかしっ」

「お前を教えられる奴なんてもういねえよ」

口の端をつり上げた。

そして、まだ納得のいかない顔をしているベリルに笑いかける。

「どっちみち、そろそろ独り立ちさせる気でいた」

「……」

しかし、カイルが怪我をする事とは別問題だ。動けなくなった彼
にこの先、何が出来るというのだろうか。

戦場しか知らない彼に何が……ベリルは1度、深呼吸をしてカ
イルを見つめた。

「解りました。入院費用とリハビリ代は私が持ちます」

「おいおい、それくらい金は持つてるぞ」

「それは老後に回してください。当面の面倒は私が見ます」

「おま……」

言おうとしたカイルに顔を近づけてニヤリと笑う。

「これくらいはさせてもらいます。文句は受付けない」

「こええなあ」

呑気に応えるカイルにベリルは少しだけ笑顔を見せた。

私はこの出来事を一生、忘れないだろう。

これほどに自由という言葉が重くのし掛かろうとは……目の前の自由に脚を浮かせ、最も働かなければならない時に働かなかった勘。

『常に冷静に』

それが、どれほど重要なのかを思い知らされた。

第5章　それでも心は痛む

18歳になったベリルは晴れて独り立ちする事となり仲間たちは歓迎した。

若いという事でそれなりの仕事は依頼されるものの、やはりまだまだ大きな仕事は来なかった。

それでも仲間たちは彼を信頼しその腕に目を見張る。

カイルは自分の持つ戦闘技術をベリルが連れてくる傭兵の卵たちに学ばせ充実した日々を過ごしていた。

『戦えなくとも出来る事はある』

ベリルはそう言っただけにそれを提案したのだ。

もちろん彼らからお金など取らない。全ての運営資金はベリルが支払っていた。

『お前たちが一人前になってからでいい』

18歳のベリルが自分よりも1つか2つほどしか変わらない者たちに言っただけ。

そして彼がもうすぐ20歳を迎える頃、大きな仕事が入ってきた。ベリルが指揮を行うというものだ。

彼は南米に飛んだ。

* 虚しい戦い

目的地に到着してすでに集まっている仲間たちと挨拶を交わす。

ベリルの事を知らない傭兵たちは彼の若い姿に眉間にしわを寄せた。いつもの反応にベリルは薄く笑い事前に情報を集めている1人に話しかける。

「状況は？」

「思わしくないな」

ベリルが受けた依頼は街の迎賓館げいひんかんに立てこもっているテロリストの殲滅せんめつおよび人質の確保。

ただし人質が死んだとしてもそれは不問に処する。

「……」

ベリルはそれに眉をひそめた。初めから人質の命など考えていない。

『テロリストの一掃』

それだけが重要課題なようだ。

傭兵に全てを任せるとは……自分たちの責任逃れのためなのか。それは解らないが軍人が介入しない事はヘタにいがみ合う事を避けられる。

ベリルは前向きに考えて見取り図を眺めた。

「迎賓館はズいぶんと離れた場所に建てられているのだな」

「ああ、静かな場所に建てたかったんだとよ」

なるほど、それで郊外にあるのか。ベリルは納得してじつくりと建物の造りを頭にたたき込んだ。

「催涙弾はあるか？」

「そんなモノどうするんだよ」

「用意を頼む。あと炸裂弾もいくつか」

「炸裂弾？ 武器は？」

「バレットM82」

アンチマテリアルライフル
「！ 対物狙撃銃か」

それに横にいた別の仲間が割って入る。

「どうするつもりなんだ？」

「彼らを一ヶ所にまとめる」

そして見取り図に指を指し説明を始めた。

「2階にまず催涙弾を投入し部屋から追い出す。その後、炸裂弾で壁に大穴を空けていく」

壁に大きな穴が空けばその部屋に立てこもれなくなる。そうして2階を破壊し全ての敵を1階に集める……という計画らしい。

「準備を進めてくれ」

ベリルはそう言って離れていった。

「若すぎやしねえか？」

今回、新しくベリルと組む傭兵が話しかけてきた。

「……」

1年前から彼を知っているケビンという男は遠くのベリルを一瞥し、クスツと笑いをこぼした。

「いいから見てるよ」

「！ そんなに凄い奴なのか？」

ケビンの反応に男は少し驚く。

言葉少なく応えたという事はそれだけの力量を持つ奴なのだ。とベリルに目を向けた。

「リストを」

ベリルは通信機器を扱っている仲間に話しかけた。出された紙に目を通す。

「！？」

一瞬、言葉を無くした。この顔は……カイルと出会って初めて戦場で見た顔だ。

「馬鹿な……っ」

一週間前は収容所にいたはず。

ベリルはあの日——国に強制送還された男たちの足取りを独り立ちしてから追っていた。

捕えた者たちは母国に強制送還されその収容所で過ごしていた。なのに何故そのうちの1人が立てこもっているテロリストのリストに載っているのだ。

「……」

リストを持つ手に力がこもる。

収容所の様子では模範囚として真面目に務めている。と聞いているのに……彼に何があったのだろうか。

「カルナ・マシアス」

少年だったベリルにライフルを突きつけた男だ。

これは試練なのか……？　こんな再会の仕方は望んでいなかった。
「ベリル！」

「！」

呼ばれて我に戻る。ぼんやりしている暇は無い。決行は数時間後だと自分で決めたではないか。

ベリルはチームを4つに分け四方から攻める作戦をとった。ヘツドセットを全員に配る。

「いきなり2階にぶつ放してもいいんじゃないか？」

そんな仲間の一言にベリルは静かに口を開いた。

「むやみに傷つける事は避けたい」

「！」

その言葉にそこにいた全員が驚く。テロリストの命まで救うつもりなのか！？

“こいつ馬鹿かつ！”

そんなリアクションの者もいる。

「最善の方法を選択しただけだ」

その瞳に誰も意見出来なくなった。

「決行までアタックポイントで待機」

ベリルの合図で皆、一斉に散らばる。

「……」
馬鹿げた作戦だという事は解っている。仲間の命すら危険にさらすかもしれない。それでも……傷つけるだけが我々の仕事ではないはずだろう……？ ベリルは強く^{まぶた}瞼を閉じた。

ベリルはリーダーであるため一番最後に突入するA班、東に位置した。まず2階を破壊する作戦のため待機場所はいつもの距離よりやや遠い。

決行5秒前……3……2……1……催涙弾が2階の部屋にいくつも放たれ、白い煙が充満する。

数秒、待って1m40cmはあるバレットM82から火花が散った。

その途端——迎賓館の中からも銃弾が飛んできた。どうやらベリルの作戦は成功しているらしい。2階からの攻撃が無い。

2階を撃ち続けている仲間はそのまま間隔を空けて攻撃の指示。裏戸にあたる方からC班が突入。

人質になっている人々は客間にいると思われる。

「……？」

最後に突入したA班のベリルは眉をひそめた。

テロリスト？ いや、この動きは……

「攻撃は威嚇のみにしろ」

<なんだって！？>

<どういう事だよ？>

ベリルの指示にヘッドセットから口々に発せられる驚きの声。

「……」

指示の撤回を行わず、ベリルは静かに立ち上がり客間に向かって歩き出した。

「！ ベリル」

「ここで待っていてくれ」

ベリルの行動に敵も攻撃を止める。

「……」

通り過ぎるベリルを険しい眼差しが追っていく。その顔立ちは中東を思わせる面々だった。

「やはりそうか」

人質に銃口を突きつけてベリルを睨み付ける男に眉をひそめる。

「！？」

その男はベリルの姿に驚きを隠せなかった。

「まさか……お前が？」

「これはどういう事なのか説明してください」

その言葉にカルナは苦い顔になる。

「俺たちは騙されたんだ……政府に」

「！」

ベリルは驚いてカルナを見つめた。男はうなだれて肩を落とす。

「別の収容所に移動だと言われて何故か目隠しをされた。随分、長い間だと思っていた」

しかし——連れられた場所は別の国。いつの間にか自分たちはテロリストとして囲まれていた。

「まさか……そんな事……」

「俺のいる国は貧しくて内戦ばかりだというのは知ってるよな」

「はい」

「そしてこの国に敵意を持っている。それだけ言えばお前なら解るだろ？」

敵対する国に少しでも痛手を追わせられるなら。それが犯罪者であるなら自国にはむしろ願ったりとなる。

そう……彼らは海外では国際犯罪者なのだから。

囲まれてただ犬死にするよりは撃ちまくって死んでやる。そんな感情になるのは当然だ。

「……」

ベリルの目に怒りが宿る。

これが、現実……現状か……カイルの言葉を噛みしめる。

「！」

カルナはベリルに銃口を向けた。

「解るだろ？ もう、これしかないんだ」

「……嫌です」

ベリルは苦い表情を浮かべる。

「俺に安らぎをくれ」

「！」

彼の殺気に、思わず銃ハンドガンを構える。

止めてくれ……ベリルは心の中で祈った。

「……」

ベリルの懇願するような目にもカルナは引鉄ひきがねの指を緩めない。

「カルナ！」

男の銃弾はベリルの頬をかすめて後ろの壁に当たる。その銃声を合図に他の男たちも発砲を始めた。

「止める！ 何故だっ！？」

他に方法は無かったのか……？ 自ら死を望む他に無かったのか！？

「……」

静まりかえった迎賓館——ベリルはカルナの死体をじっと見下ろす。

「ベリル」

ケビンがベリルの肩を揺する。

「人質は無事だ。みんな、よくやってくれた」

ベリルはそう言うのとハンドガンを仕舞って歩き出した。

作戦終了後の処理を始める。その瞳は凜として彼の意志の強さを窺わせた。

彼にとって作戦の結果は気に入らないものとなったがその評価は高く、これから先ベリルはこう呼ばれるようになる——『Marvellous mercenary』^{ヴェラス マーセナリー}

「素晴らしい傭兵」と……その名を彼が気に入っているかと問われれば、答は「NO」だろう。通り名とはそういうものだ。

ベリルは虚しさだけが残った戦いに溜息を深く吐き出した。

*器・うつわ・

「そうか」

カイルは帰ってきたベリルから報告を受けて目を伏せる。

「よく頑張ったなあ」

「！」

小さく笑ってベリルにそう言った。

「……」

ベリルはカイルの笑顔に視線を外した。

全てを背負う必要は無い。お前が彼を覚えていればそれだけでいいんだ。誰かが彼のために涙を流せるなら……それだけで『この世は捨てたもんじゃない』と思える。

カイルがよく言う言葉をベリルは強く目を閉じて心に刻み込んだ。
『生まれる場所は選べない』

それが怒りを生み死の連鎖を生む事がある。もちろんそれは許されるものじゃない。その中で乗り越えようとする者もいるのだからだが……もしかすると自らそこを選んだかもしれない。苦境を乗り越え自らの魂の輝きを高めるために――

「……」

ならば『私』はなんだ……？ ただ1つの『作られた器』を私自身を選んだと……？ 考えても解るはずはなかった。

「人間……か」

ベリルは施設にいた時の事を思い浮かべる。

あれはまだ5歳の頃――夜中に寝付けなくて施設内を歩いていた。大きな地震が隣国で起こった前夜だ。

「！」

ふと、1つの扉に目が留^とまる。いつもはかけられている鍵が開いていた。

自動扉やガラス張りの扉が多い施設内に珍しく無骨なドア。

「……？」

ゆっくりと顔を覗かせて部屋の中を見回す。

そこは薄暗く低い電子音が不気味に響いていた。静かに中に入つてドアを閉める。

「……」

ベリルは無表情にそこにあるモノを見つめていく……四角い水槽がいくつも並べられていて、そこに沈められているのは異形の生物。

「……」

生物、という言葉はある意味正しくないのかもしれない。それは『人間になったかもしれないモノ』。ベリルはその1つに手を添える。

3歳の時に聞かされた真実。その真実と目の前にある水槽とが強く結びつく。

全てヒトDNAといえど解明されていない部分の多い遺伝子。それを切り刻みつなぎ合わせて1個の人を造り出す事など不可能に近かった。

それを実感出来るモノたちがここにいる——手はあっても骨の無いもの。頭があっても脳の無いもの。足のあるであろう部分に手のあるもの。

おおよそ普通の人間が見れば吐き気をもよおす光景をベリルはじつと見つめていた。

まだ成長出来ている姿ならそれが解る。しかし大半は体と呼べるものが形成されてすぐ死んでいるようだ。

言うなれば……母親の胎内に数ヶ月いた姿。

生きる事の出来ない生物。ただ作られては消えるモノ。

「……」

少年は目を細めばそりつつぶやく。

「私の……仲間」

ゆっくりと水槽を見つめながら歩き出した。

「！」

1つの水槽に釘付けになる。

それは『子ども』と呼べるにふさわしい姿と成長を見せていた。

5歳ほどだろうか、液体に浸けられた折曲げられた体……その瞳は淡いブルー。何も映さない目はベリルを見つめる。

だが『彼』はベリルのような成長は出来なかったのだろう。その体には生前、生命維持装置が付けられていた事が窺えた。

それでも5年は生きられた者。だが『彼』はきつとなんの感情も無かっただろう。

生命維持装置に頼っていたのと、5年しか生きられなかった理由は……

「脳がほとんど無い」

言うなればベリルの『兄』であろうか。

「！ベリル？ どうしてここに……っ」

科学者の1人がベリルを見つけ慌てて彼の腕を掴んだ。

「ここに入ってはいかんっ」

「すみません」

つまみ出されて自分の部屋に戻った。

それからしばらくは科学者たちを見ると睨み付ける事もあったが、彼らがいなければ自分はいなかったのだと思うようになった。彼ら自身も自分たちの研究を良しとしているのではない事を感じていた。だから生まれたベリルを可愛がる。

『生まれてくれた』と安堵して……彼らは彼らなりに苦しんでいたのだ。

幼いベリルにもそれが見て取れた。自分がさらにその苦しみを重くさせる事など出来なかった。

今でも、その部屋の光景は鮮明に覚えている。あの中で最も成長していたのはその1体のみだった。

ほとんどは細胞分裂から数ヶ月か1歳未満ほどだったろう。生命

の神秘を読み解く事が目的だったのか、他の理由があつたのかは解らない。

ベリルに関する資料は全て灰になっていたからだ。

襲撃を受けた時、外に一端逃げ出した彼が死体の転がる施設に再び足を踏み入れいくつかの部屋が焼け落ちていた事を確認した。

『秘密保持のためのシステム』

ボタン1つでその部屋だけ燃えるように作られていたと考えられる。焼け落ちた部屋が3つ……データ室と実験室。そして『失敗作』の置かれた部屋だ。

ベリルは施設にいる全ての人間の名を覚えていた。

目の前の自由を掴む前に外に咲いていた花を摘み1人1人に添えて施設をあとにした。

襲撃した連中が戻ってくるかもしれないという恐怖はあつたが、どうしてもそれだけはして行きたかった。

何故、自分だけ成功したのか。どうして生まれたのか。そんな事は解らないし知ろうとも思わない。

何故なら今、ここにいる事がその全てなのだから。誰がどんな理由をまくしたてようとも己の意志が現実なのだから。

最終章　たゆたう波の終わり

ベリルはブルー教官によって自由を得てカイルにより生きる場所を得た。

定まらなかった己の居場所——戦いでしか救えない命があるのなら、その罪を私は背負おう。

これは決して正義などではない。

どんな理由があるにせよ人が人を裁くなどあつてはならない。

「どのみち私は生まれながらに罪人だ」

目を細めて自分の手を見つめる。

人の業で作られた己……それでもこの世界は生きる事を許してくれている。いつかその日が来るまでは——死が訪れるまでは私は戦い続けよう。

そんな意志を胸に秘めた5年後……

* 予期せぬ報告

「はぁ!？」

カイルはベリルの報告に間抜けな声を上げた。

引きずる足で立ちつくし苦笑いを浮かべている青年を見つめる。

「不老不死になったただぁ!？」

「……」

目を丸くしているカイルに再び苦笑いを返す。

「それ、マジで言ってるのか？」

「こんな嘘、意味ありますか？」

「そりゃそうだけだよ」

言われて苦悩の顔をする。近くのイスに腰掛けてベリルを見上げた。

「いきさつは聞いたが……神様も随分な事をしてくれるよなぁおい」
まさか休暇で過ごしていたオーストラリアで偶然、出会った少女に不老不死の力があつただなどと……

「仕方なくお前に使ったのはアレとしてだ。そいつはどうしたんだ？」

「もう狙われる事はありませんよ。その力は1度きりのものらしいので」

その少女は住んでいた場所から連れ去られオーストラリアで逃げだしベリルと出会った。そのままベリルは彼女を守りその結果——
彼に不死の力を使ってしまったという訳だ。

「そうか、それならお前も使われた甲斐があるってもんだよね」

「ええ」

ベリルがベリルならカイルもカイルだ。相手の心配をしている。
それがこの2人の良い処なのかもしれないが。

「……」

しばらく考えたあと、ベリルに目を移しニヤリと笑う。

「お前の計画、水の泡だな」

「！」

ベリルは一瞬、驚いて切れ長の瞳を丸くする。そして目を据わらせカイルを見つめた。

「それが解っていたから私を弟子にしたのでしょうか？」

その言葉にカイルはニパツと笑う。

「おう！ 当然だ！」

『死にたい訳じゃない人間が思った通りに死ぬるとは限らない』

ベリルがまさにそうだった。

むしろ、どうあがいても死ぬ事が出来なくなったのだ。

「……」

さすがの俺もそこまでは考えてなかったなあ……なんか、ちょっと哀想になってきたぞ。いくらなんでも不死ってのはやりすぎだろ神様さんよ。

とカイルは複雑な表情を浮かべて青年を見やった。

「お前も不運というかなんというか……」

眉間にしわを寄せてつぶやく。

「なってしまったものは仕方ありません」

しれっと応えた。

「お前らしいねえ」

苦笑いで発したカイルにベリルはニコリと微笑む。

『素晴らしき傭兵』

不死となったベリルはその他にもいくつか名前を付けられる事になる。当然どれも気に入らない。

鋭いエメラルドの瞳は決して敵を逃す事は無いだろう。

彼を求める者は幾多になるのか見当も付かない。その度にきつと彼は笑ってさらりとその腕からすり抜けていく事だろう。

彼の戦いはまだ始まったばかり。

何を想い、何を成すのか——見届けるのはあなた。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6322r/>

たゆたう波の終わり

2011年8月30日03時25分発行